

「旧三河島污水処分場唧筒場施設」



手前の建物が濾格室上屋で、奥がポンプ室（写真提供：東京都下水道局）

荒川ふるさと

文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録(19)0053

文化財NEWS速報

国の
重要文化財に
指定!

桜の名所として区民の皆さんに親しまれている三河島水再生センター（荒川八丁目）の、「旧三河島污水処分場唧筒場施設」が、区内の有形文化財としては初めて、国の重要文化財（建造物）に指定されました。

旧三河島污水処分場と荒川区の歩み

三河島污水処分場は、東京市内の下水道整備事業の一環として、北豊島郡三河島村大字三河島に建設されました。大正3年（一九一四）に起工、同11年（一九二二）に運用を開始しました。当時としては最新の欧米の下水処理技術を導入した日本初の近代下水処理施設です。敷地面積は55,935坪、一日当たり約40万人分の下水処理能力を持っていました。

当時、荒川区を始めとする東京城北部一帯は低地で、昔から毎年のように水害の被害を受けてきました。水害で最も恐れられていたのは、コレラなどの伝染病が蔓延することです。また、富国強兵・殖産興業政策を推し進めていた日本は、法律はもちろんのこと、様々な設備を近代化する必要性がありました。

そんな状況の中、東京市は市内低地における雨水・污水の一切を沈澱濾過して荒川（現隅田川）に放流

するための施設として、市外である三河島村に污水処分場を建設することにしたのです。候補地となった三河島村では、誘致に反対・賛成など様々な意見がありました。三河島村役場への道路整備などを条件に污水処分場設置に合意しました。竣工当初は、荒川区は東京市外であったため施設を利用することができませんでしたが、誘致したことで、他区よりも早く昭和30年代にはほぼ区内全域で下水道が完備しました。

「旧三河島污水処分場唧筒場施設」とは

今回指定された「旧三河島污水処分場唧筒場施設」は、処理場へ入ってきた下水が最初に通る場所です。下水に混じる土砂や浮遊物などを除去し、沈澱池と呼ばれる施設へポンプを使って下水を揚げる役割を担う污水処分場の主要な施設でした。ポンプが収められたポンプ室の建物はもちろんのこと、地下に埋設された施設も建築当初の構造をよくとどめています。

この施設は、平成11年に稼働を停止しましたが、日本に導入された当時の近代下水処理システムの遺構としても重要で、土木・建築技術の歴史的な価値も高いものです。また、関東大震災前に建てられた鉄骨・鉄筋コンクリート造の数少ない建物としても貴重です。

荒川区にある国の文化財

荒川区では、平成6年に松本社中の「江戸の里神楽」が国の重要無形民俗文化財に指定されました。今回の「旧三河島污水処分場唧筒場施設」が2件目の国の文化財です。

私たちの身近にもさまざまな文化財が残されています。区教育委員会では、これらの文化財を大切に保存し、後世へ継承していくことに今後も努めていきます。

（加藤陽子）

自然としての滝と文化としての滝 古来、滝は信仰の対象であり、信仰を實踐する場でもあったが、今日の私たちにとってはどうか。あえていえば感動の対象といったところだろうか。試みに『広辞苑』を引いて見ると、①「河の瀬の斜面の急な所を勢よく流れる水」、②「高いがけから流れ落ちる水」とあり、いずれにしても自然の中で水が流れる現象そのものをいう。しかし単なる現象にとどまらず、③夏の季語、でもあるらしい。俳句の世界では今でもある意味常識といわれそうな、滝といえ夏をイメージする言葉なのだ。

滝と夏 滝と夏を結び付けるのは、納涼・避暑といった夏に人びとがとりそうな行動である。だいたい滝は崖から流れ落ちるものであって基本的に滝つぼは日陰であり、19世紀初めの文献によると、江戸の人びとはしばしば滝へ赴き涼を楽しんでいる。滝つぼに飛び込み、泳ぎだす人もいた（『遊歴雑記』）。かつて滝は、納涼のための場所としてポピュラーな場であり、結構身近な所にあるものだった。

身近な場所にあった滝 その証拠に、荒川遊園には男滝・女滝があった。昭和初年当時、「東京に最も近き避暑地 山水木石園内 式万坪完備 暑さ知らずの仙境 涼味万斛、風景絶佳 有名なるあら川大瀧あり 安全飛行塔数十台建設」というのが売り文句だった。つまり、昭和初年頃まで滝は納涼・避暑のための施設だった。

また、小台の渡しの渡し場にあった料亭・清水滝にもその名の通り滝があった。井戸から引かれた水は、奇石を積んだ上に生い茂る楓や熊笹の間から、弧を描いて約3丈（9m）ほど水が流れていた（石

過ぎゆく季節へのたよりⅣ

道灌山に滝があった頃

田龍城『明治秘話』。
尾久の二つの滝はいずれも王電（現都電荒川線）に乗っていくところだったが、徒歩が主流の時代では、歩いて行ける範囲、つまり江戸・東京近郊にくつかの滝が見出されていた。比較的身近なところでは名主の滝（現北区）が挙げられる。その他、音羽（現豊島区）・角筈十二社（現新宿区）、等々力（現世田谷区）・目黒（現目黒区）などにも滝があり著名だった（以上、『江戸学事典』『江戸東京学事典』）。そして実は、あの道灌山にも滝があった（左下写真）。もともとそれほど有名ではないが。

道灌山の滝 安政5年（一八五八）8月4日、江木鰐水という人がこの滝を訪れている（以下、『大日本古記録 江木鰐水日記』上）。鰐水の日記によれば、この滝は与一という農夫が作った人工の滝で、樋で水を引き、流れ落ちる滝つぼには板が張られ、座って水しぶきを浴びるところになっていた。脇には茶屋まであったという。

造られては壊された 近くに
あるなら一度行ってみたいもの
だが、今はもうない。道灌山の
滝は明治38年（一九〇五）に完了
する鉄道線路敷設工事により、崖自体
が削り取られ、消滅した。一般に滝は
自らの水の流れによる侵食により後退
したり低くなったりして、ついには消
滅、ないしは滝とは呼べない形になっ
たりするそうだが（『水の百科事典』）、
江戸・東京近郊の滝は造られ、そして
壊されるものだったらしい。荒川遊園・

清水滝もその例にもれない。このことは滝に対する需要が生まれ、なくなったことと重なっている。納涼という行為の変化であるともいえるだろう。かくて、夏の季語としての滝のもつ語感も失われていった。多くの人びとにとって滝は、鉄道や車に乗って行く、より遠い場所になっていった。

鰐水の眼 最後に鰐水の日記に戻ろう。鰐水はこの日の日記を次のように結んでいる。都会の者は繁華なものを見る目はあるが、「山水遊観」を見る目がないので、こんなものを滝だというのだ、笑うべし、と。

というのも、道灌山の滝が、高さ一間半（約2.7m）だったからである。当時の江戸の人びとにとって紛れもなく滝だったが、福山藩の儒学者で医者だった鰐水には、この流れ落ちる水を滝とは認めがたかったのである。

地方のみならず外国の有名な滝へ行く機会があり、写真や映像で目にするところがある今日の私たちは、鰐水と同じ眼をもっているのではなからうか。

（亀川泰照）



「江戸の花 名勝會」

(国立国会図書館 HP「貴重書画像データベース」より転載)

あらかた
タイムトラベル⑬



『東都歳事記』
「千住綱曳」から見えるもの

登場人物・某TV記者・荒川ふるさと文化館学芸員・綱引きをする若者

なにやら荒川ふるさと文化館の中が慌ただしい様子です。ちよつと覗いてみましょう。

たくさんの錦絵・古写真、そして大きな絵馬やら、古びた道具やらが次々に運び込まれています。よく見るとそれらには共通点が……。どうも「千住大橋」に関わりの深い品々が、集められているようです。来春の2月9日(土)〜3月23日(日)を会期とする企画展「千住大橋鉄橋化80周年記念 千住で一番・江戸で一番 千住大橋」展の準備をしている模様です。

中には、今日の荒川区ではちよつと見慣れない光景を描いた絵もありますね。興味深いですね。ちよつと、当時にタイムスリップしてインタビューしてみましょう。

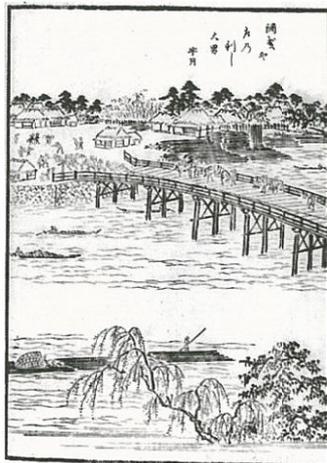
―場面―某年6月9日千住大橋の上―

さあここは、江戸時代の千住大橋南詰め、屈強な若者達が団子状になって何かをしています。

「お取り込み中すみません、みなさん何をしていますか」「何をしていますか」「何をしていますか、見りゃわかるつてもんだらう。あんたもそんなところにボケーと突っ立ってねえで、しっかり握って引つ張るんだよ。そうだその調子、手を抜くんじゃねえぞ。北の橋戸町の奴らに負けちまうからよ」

―何とか逃れて―

何とこの人たちは裸で綱引きをしているのです。対岸の豆粒のような人だかりは橋戸町の人たちと思われれます。絵の中には描き切れてはいませんが、恐らく必死の形相と思われれます。旅人も思わず立ち止まり、相当の盛り上がり運動会です。



千住大橋綱曳「東都歳事記」
天保9年(1838)刊。斎藤月岑編、長谷川雪旦画

―場面―荒川ふるさと文化館―

「学芸員さん、ちよつとお聞きしてよろしいですか。どうして橋の上で運動会をしているのですか?」「これは運動会ではありませんよ。千住の綱引きという、6月3日からの小塚原天王社(今の素盞雄神社)の祭礼の最終日9日に、千住大橋の南側と北側の住人で引き合ったれつきとしたお祭りです。『旧考録』(足立区立郷土博物館蔵)という史料によれば、文禄3年(一五九四)6月8日夜から橋の上で

藁の大綱を引き合うようになり、宝暦年間(一七五一〜一七六三)まで毎年行われたと言います。『文禄3年と言え、千住大橋が架橋された年じゃないですか?』『よくご存知ですね。架橋を9月とするものもありますが、このお祭りは千住大橋が無ければ成り立たないお祭りです。千住大橋は、モノや人を対岸に渡す役割を果たすだけでなく、南と北の町の交流を生み出し、そこに住まう人と人の心をも結んでいたんですね。』学芸員さん、松尾芭蕉さんの奥の細道等に代表される旅を考えると、もつと遠くの町や人をも繋いでくれたと言えるんじゃないですか?」「いいところに気付きましたね。今回の企画展は、400年に亘る千住大橋と人との関わりの証を、皆さんの目の前にご披露しますよ。乞ご期待!」
(野尻かおる)

訃報

- 荒川区登録無形文化財(べつ甲細工)保持者、矢吹春夫氏(享年71歳、南千住)は、去る平成19年4月24日に逝去されました。
 - 荒川区指定無形文化財(菓子木型)保持者、伊藤長壽氏(享年70歳、南千住)は、去る平成19年7月9日に逝去されました。
 - 荒川区指定無形文化財(金槌)保持者、高野由治氏(享年94歳、荒川)は、去る平成19年9月3日に逝去されました。
 - 荒川区登録無形文化財(仏壇彫刻)保持者、酒場敬氏(享年74歳、東尾久)は、去る平成19年10月1日に逝去されました。
 - 荒川区指定無形文化財(刷毛)保持者、関根起吉氏(享年79歳、東尾久)は、去る平成19年11月2日に逝去されました。
- 謹んでご冥福お祈りいたします。

中 区 3
土 荒 川

何が出てきたのかな？

最近、荒川区内では家の建て替えなど開発工事によって、いくつかの遺跡の調査が行われています。今回は2つの遺跡と出土品をご紹介します。

◆町屋四丁目実揚遺跡C地点(町屋4-14)

町屋四丁目実揚遺跡内ではA、B地点に続き、3カ所目のC地点の調査が行われました。当遺跡は、低地の中の微高地に立地しています。周辺は住宅が密集した古くからの道が多く残る場所です。これまでの調査では、弥生時代末期から古墳時代の溝、周溝、木枠を組まれた井戸、土師器、江戸時代の溝が発見されています。

今回の遺跡は、保育園建設工事に伴って見つかったもので、調査の結果、古墳時代の周溝、溝が検出し、溝の中からは土師器の壺が出てきました。

また、今回、荒川区内で初めて古墳時代の管玉が1点見つっています。この管玉は、古墳時代の土



溝から出土した管玉

師器のかけらと一緒に溝から出土したことから、古墳時代のものと考えられます。

ところで、管玉とは何でしょうか。その繊細な姿は写真の通りです。管玉は装身具の1つで、当時はアクセサリとして自らを飾るために使う他、呪術的な意味合いや社会的身分の違いを表すこともありましたが、本遺跡からは、1点しか発見されませんでした。いくつかつなげて首飾りにした例が多いのですが、大きさは、長さ5・2cmほどで、材質は石で緑色凝灰岩と見られています。この緑色凝灰岩は、火山灰が固まってできた比較的軟らかい岩石です。開けられた穴の中をのぞくと、凸凹もなく、貫通して完成品であることがわかります。



町屋四丁目実揚遺跡C地点
調査区北西から。遺構を確認したところに白線が引かれている。

遺跡からは他に、古墳時代から江戸時代の井戸跡と思われる遺構が8基見つかりました。この辺りの土地は、1mほど掘削すると水がしみ出て、湧水する場所です。砂地の土を素掘りに掘られた井戸がほとんどですが、一ヶ所、曲げ物を伴う井戸が見つかっています。この曲げ物は、井戸底と推定される部分に置かれていました。これまで荒川区外では見つかっていますが、区内では初めての発見です。豊

富な湧水がこうした木製品を腐らせることなく、現代に残す結果となっています。3回の調査では、調査面積も狭く、まだわからないことも多いのですが、少なくとも弥生時代末期からの人びとの痕跡が見られ、貴重な結果となっています。

◆日暮里延命院貝塚B地点(西日暮里3-13)

次にご紹介するのは、日暮里延命院貝塚の北に隣接する遺跡です。マンション開発工事に伴って、前回昭和63年に調査した貝塚の延長部分が見つかりました。

前回と同様に貝殻が多く出土した他、貝製品、骨角製品、縄文土器などのいろいろな道具、動物の骨が出てきました。調査地の東側は貝層が厚く堆積し、掘り進めていくと、貝層の下の部分周辺から注口土器(左写真)が出土しました。注ぎ口の一部分が欠



日暮里延命院貝塚B地点出土 注口土器

けている以外、ほぼ完形の縄文土器です。現在、2つの遺跡とも現地調査は終了しています。整理調査が行われています。来年の春頃には報告書が刊行され、遺跡の内容がさらに明らかになるでしょう。お楽しみに。
(八代和香子)